

令和元年度
【短期研究3】

一時保護されたDV被害女性と子どもの実態把握に関する研究

(要旨)

近年、DVの相談件数は増加傾向にあるが、一時保護利用に関しては減少傾向にあり、これらの背景には、利用者の支援ニーズと支援枠組みのミスマッチがあることが報告されている。そのため、この問題を解消するためには、まずは利用者の生活環境や生活様式の実態調査を行い、利用者のニーズを改めて理解する必要があると考えられた。

そこで本研究では、現在のDV被害女性とその同伴児の実態把握を目的とし、質問紙を用いてDV被害女性の心身の健康状態や過去のトラウマエピソード、日常生活上の問題行動を実行機能の観点から評価した。子どもにおいては、睡眠習慣、母親同様日常生活上の問題行動を実行機能の観点から評価した。

結果は、DV被害女性に関しては、一時保護状況下の安全が守られた中で生活することで健康状態は良好であるが、精神状態は4割以上があまりよくないと感じているという回答が得られた。長期間の夫からの暴力内容は多くの人が重複したものが多く、大きな精神的負担になっている。また、日常生活上の問題を実行機能の観点から評価した結果については、30代の女性で全体を把握することや、見通しを持って物事に取り組むことなどの問題が多いということが明らかになった。

子どもに関しては、就学前、小学生の睡眠習慣は、全国平均と大きく変わらないが、睡眠の問題スクリーニング項目の得点が高く、睡眠の質が低い可能性が示唆された。実行機能の問題については、5歳-7歳の男子で見通しを持つことの問題、8-10歳で自分の行動を振り替えること、8-10歳の女子で感情制御の問題が多いことがわかった。

今後はデータ数を増やし、よりDV被害女性や子どものニーズを反映した支援にむけての詳細な調査が必要であると考えられた。

研究体制：桃田茉莉、藤田忍、小堀徹、大澤智子、松下清美、亀岡智美

I, はじめに

平成 29 年度分の配偶者暴力相談支援センターにおける配偶者からの暴力が関係する相談件数は、77,482 件（前年比 + 5,027 件、+ 6.9%）で平成 13 年度の DV 防止法の施行後最多であった（内閣府, 2018）。しかし、平成 28 年度婦人相談における一時保護件数は、8,642 件で平成 26 年度からの減少傾向が確認されており、相談件数の増加と比例しない結果となっている。

この一時保護が利用されない理由について岩本・増井・山中 (2019) が行った実態調査によると本人ニーズと支援枠組みのミスマッチが指摘されており、本人が一時保護を希望しない理由が多いことが報告されている。このことから DV 以外の主訴に対する支援方策の再検討、本人ニーズにあった支援方策の再検討の必要性が提示されている。

近年、小学生から成人までスマートフォンや携帯ゲーム機などのメディア機器を所有し、その長時間使用が日常化されていることや、日本人男性と近隣アジア諸国出身女性の国際結婚の増加など多様な社会的・生活上変化に伴い入所者の実態及び支援ニーズは変化していることが想定される。しかし、これまでそういった実態把握を目的とした研究において既存の質問紙を用いて DV 被害女性の精神的健康や子どもの生活習慣、認知機能などを検討した研究は見られない。そこで、本研究では、入所中の親子を対象に基本属性を整理し、過去のトラウマエピソード、子どもの生活習慣や日常生活上の問題の実態を明らかにすることを目的とした。

本研究を実施することで、今後一時保護される親子の支援ニーズを的確に捉えるための指標となり、当該親子に関わる職員の理解を深めることにつながることを期待される。

II, 方法

(1) 調査対象

兵庫県女性家庭センターで一時保護を利用した女性及びその子どもに実施されている支援ニーズを把握することを目的とした質問紙調査データの提供をうけた。特定の期間に当該機関を利用した女性および子どものデータを対象とした。

(2) 実施場所

兵庫県女性家庭センター内の面接室。

(3) 提供を受けたデータ項目

① 基本属性及び母親の健康状態及び相談窓口に対する質問

性別、年齢、婚姻状況、就労状況などの質問、及び相談窓口について回答を求める。さらに、センターを利用し、良かったと思うところ、今後に望む支援に関して自由回答で記述した。

② 過去のトラウマエピソード

ライフイベント・チェックリストと出来事チェックリストの2種類を用いた。ライフイベント・チェックリストとは、被験者にこれまでの人生で起こった出来事について回答を求める質問紙である。質問項目は17項目で回答は、自分に起きたこと、目撃した、知らされた、仕事上で、確かでない、あてはまらないで回答する。出来事チェックリストでは、該当する出来事が1回のみか2回以上の複数かについて回答を求めた。

③ -A 女性の日常生活上の実行機能について

成人版実行機能行動評価尺度 (Behavior Rating Inventory of Executive Function-Adult Version; BRIEF-A) を用いた。BRIEF-A は、家庭や日常環境における行動を評価し実行機能の査定を可能にする成人のための自記式の質問紙である。全72の質問項目で各項目については、問題にならない、ときどき問題になる、しばしば問題になる、の3件法で回答する。

③ -B 子どもの日常生活上の実行機能について

親評価版実行機能行動評価尺度 (Behavior Rating Inventory of Executive Function; BRIEF) を用いた。BRIEF とは、家庭や学校環境における行動を評価し実行機能の査定を可能にする就学児童・生徒のための質問紙である。全86の質問項目で各項目については、問題にならない、ときどき問題になる、しばしば問題になる、の3件法で回答する。

④ 子どもの睡眠習慣について

子どもの眠りの質問票を用いた。子どもの眠りの質問表とは、子どもの睡眠習慣や睡眠の問題をスクリーニングする養育者記入の質問紙である。幼児版の睡眠の問題に関しては、足の違和感を訴えるような行動をレストレスレッグス症候群 (Restless Legs Syndrome; RLS) (感覚)、夜になると足をさすったり動かしたりする行動をRLS (動き)、口を開けて眠る、いびき、息が止まるなどの状態を睡眠時無呼吸障害、夜泣きや歯ぎしりなどをパラソムニア、夜の不機嫌さや朝早く目覚めるなどを不眠リズム障害、目覚めに時間がかかるや布団から出られないなどを朝の症状、昼間疲労や居眠りなどが見られるなどを日中の眠気、日中の落ち着きのなさや集中力のなさなどを日中の行動、自分ひとりでベッドや布団で眠るなどを睡眠習慣、平日や休日の眠る時間の変化などを睡眠不足で測定する。小学生版には、RLS を1項目、平日と休日の睡眠時間の変化などを不規則・位相後退で測定する。これらには、幼児版、小学生版、中学生版が存在し、中学生版は本人記入項目がある。日中の行動を評価する項目やライフスタイルを評価する項目は、全く当てはまらない～非常によく当てはまる、の6件法で回答する。これらの質問項目の中から一部を利用した。

以上、全ての質問紙の該当する項目に回答した調査協力への謝礼として500円分のQuoカードを進呈した。

倫理的配慮

この研究は、兵庫県こころのケアセンターの倫理申請委員会の承認を経て実施された。

Ⅲ、結果

① 母親の基本属性、健康状態及び相談窓口に対する結果

性別、年齢、婚姻状況、就労状況などの質問、及び相談窓口についての回答を求めた結果を表1に示した。参加者14名のうち、30代女性が一番多く、6名は常勤で仕事を持つ女性であった。暴力内容に関しては、参加者全員において重複する暴力被害を受けていた。さらに、体調や食欲は40%以上が「よい」「普通」という回答であるのに対し、精神状態は42.9%が「あまりよくない」という回答であった。

年代	人数	%	婚姻状況	人数	%
20代	2	14.3	現夫	12	85.7
30代	5	35.7	前夫	2	14.3
40代	6	42.9			
暴力内容(重複あり)	人数		就労状況	人数	%
身体的暴力	6		常勤	6	42.9
精神的暴力	10		非常勤	1	7.1
性的暴力	4		主婦	6	42.9
経済的暴力	5		無職	1	7.1
同居年数	9.63年				
暴力のあった期間	7.91年				
体調	人数	%	食欲	人数	%
とても良い	2	14.3	とても良い	2	14.3
よい	6	42.9	良い	5	35.7
普通	4	28.6	普通	6	42.9
あまりよくない	2	14.3	あまりよくない	1	7.1
食欲	人数	%	精神状態	人数	%
とても良い	2	14.3	とても良い	1	7.1
良い	5	35.7	良い	4	28.6
普通	6	42.9	普通	3	21.4
あまりよくない	1	7.1	あまりよくない	6	42.9

現在の支援に関する自由回答については、一時保護を利用し、良かったと思うところ、今後に望む支援に関する質問に関する自由回答からは、話を聞いてもらえる、寄り添ってもらえたという経験、また食事が提供され、子どもを預けることができる点が安心感を得られ、好評化を得ている。今後に望む支援からは、今後の生活に関する情報収集をしたいという声やDVについての理解を他機関に求める回答が得られた。詳細は付録Aに記載した。

② 過去のトラウマエピソード

結果を表2に示した。自身のDV被害以外にも自然災害や家事や事故、子どもが虐待される場面の目撃などの出来事を経験していることが明らかになった。

ライフイベント・チェックリスト	A	B	C	D	出来事チェックリスト	1回以上	2回以上
1, 自然災害	9	2	2	0	1, 自然災害	4	3
2, 火事や爆発事故	0	2	1	0	2, 火事や爆発事故	2	1
3, 交通事故	5	1	3	0	3, 交通事故	6	7
4, 職場, 家庭, ないし余暇活動中の深刻な事故	0	1	0	0	4, 有害物質への暴露	0	0
5, 有害物質への暴露	0	0	0	0	5, 職場, 家庭, ないし余暇活動中の深刻な事故	0	0
6, 身体的暴行	9	3	3	0	6, 身体的暴行	4	7
7, 武器を使った暴行	2	2	0	0	7, 武器を使った暴行	1	2
8, 性的暴行	3	0	0	0	8, 監禁	0	0
9, 意に反した不快な性的体験	5	0	0	0	9, 性的暴行	0	2
10, 戦闘や戦場体験	0	0	0	0	10, その他, 意に反した, 極めて不快な性的体験	2	2
11, 監禁	1	1	0	0	11, 子どもの頃の身体的虐待	0	1
12, 命に関わる怪我	0	1	1	1	12, 戦争体験	0	0
13, 人間としての重大な苦痛	11	1	0	0	13, 殺人などの目撃	0	1
14, 突然の暴力的死(殺人, 自死など)	1	0	0	1	14, 身近な知人が巻き込まれる	2	2
15, 突然の事故死	1	0	2	1	15, ひどいショッキングな出来事	1	7
16, 他人に深刻な怪我や障害, 死を招いた	0	0	0	0	これまでの最も強いストレス		
					6, 身体的暴行	6	
					9, 性的暴行	1	
					14, 身近な知人が巻き込まれる	1	
					15, ひどいショッキングな出来事	6	
					一番最近の出来事の NO		
					6, 身体的暴行	6	
					14, 身近な知人が巻き込まれる	1	
					15, ひどいショッキングな出来事	6	

注. ライフイベント・チェックリスト: A, 自分に起きた; B, 目撃した; C, 知らされた; D, 仕事上で。

③ 日常生活上の実行機能に関して

女性の自己評価による BRIEF-A 回答結果を表 3-A、母親評価による子どもの BRIEF 回答結果を表 3-B に記した。これらは、得られた得点を年齢ごとの換算表から t 得点に変換し、評価される。Gioia et al., (2005) によると t 得点で 65 点を上回る項目については、通常より問題が多いと評価できるとされる。

	抑制	シフト	感情 制御	セルフ モニタ	開始	WM	計画/ 組織	タスク モニタ	物の 整理	BRI	MCI	GEC
20代	36	47	47	37	37	49	44	40	42	41	41	41
30代	48	61	55	55	51	57	53	56	54	54	72	55
40代	45	57	54	46	52	58	51	52	52	52	53	52

注、WM= (Working memory; ワーキングメモリ), BRI= (behavioral regulation index ; 行動調性指標), MCI = (metacognition index ; メタ認知指標), GEC = (global executive composite ; 全実行機能指標)。

まず、BRIEF-A の結果からは、20 代女性の結果は、他の年齢と比較して得点が低かった。30 代の女性に関しては、MCI 項目が t 得点 65 点を上回り、通常よりも問題が多いことが明らかになった。また、40 代の女性に関しては、 t 得点 65 点を上回る項目はなかったが、30 代について得点が高いという結果であった。

母親評価による子どもの BRIEF 回答における男子 (5-7 歳) の結果は、MCI 項目が t 得点 65 点で日常生活上のメタ認知の問題が多いことがわかった。男子 (8-10 歳) に関しては、モニタ項目が t 得点 65 点を上回った。男子 (11-14 歳) に関しては、どの項目も t 得点を上回ることはなかった。女子 (8-10 歳) に関しては、感情制御項目が t 得点 65 点を上回り問題が多いことがわかった。

	抑制	シフト	感情 制御	開始	WM	計画/ 組織	物の 整理	モニタ	BRI	MCI	GEC	
男子	5-7 歳	40	37	38	39	48	52	43	63	36	75	44
	8-10 歳	60	64	62	59	63	63	39	66	64	60	62
	11-14 歳	43	45	42	47	42	42	46	45	43	43	42
女子	5-7 歳	46	41	50	51	49	49	45	40	46	46	46
	8-10 歳	40	44	71	36	39	40	40	35	41	46	38

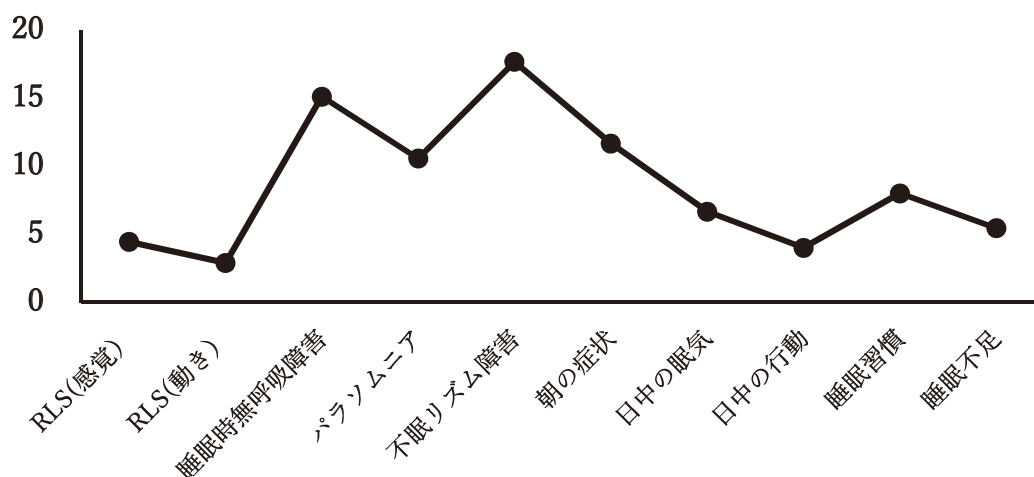
注、WM= (Working memory; ワーキングメモリ), BRI= (behavioral regulation index ; 行動調性指標), MCI = (metacognition index ; メタ認知指標), GEC = (global executive composite ; 全実行機能指標)。

④ 子どもの眠りの質問表

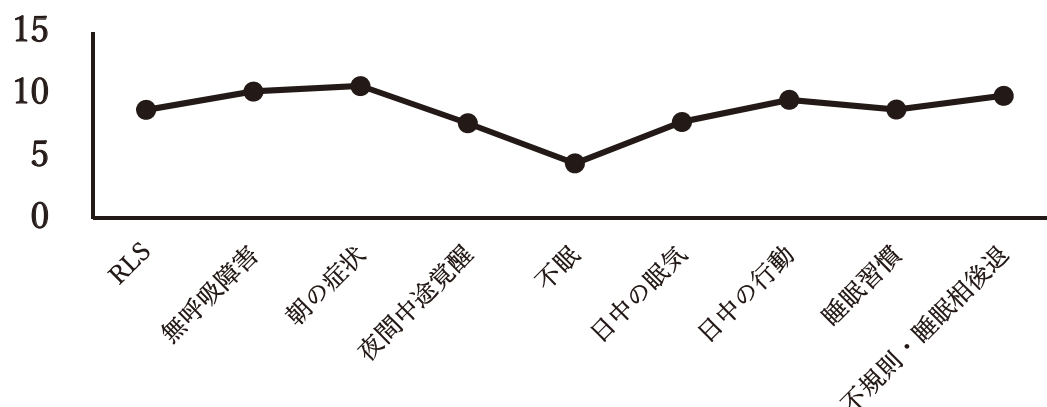
3歳から6歳の幼児9人の平均起床時刻は、7時08分、就床時刻は、21時18分であった。小学生の子ども9名の平均睡眠時刻は、7時07分、就床時刻は、22時02分であった。中学生の子ども3名の平均起床時刻は、6時56分、就床時刻は、22時06分であった。

睡眠関連疾患のスクリーニング項目

この項目では、幼児版の結果を図1-Aに示した。下位項目で要検討となるカットオフを示す項目が10項目中5項目（RLS感覚・動き、パラソムニア、朝の症状、日中の眠気）あった。また、小学生版の結果図1-Bに示した。下位項目でカットオフを示す項目が9項目中7項目（RLS、無呼吸障害、朝の症状、夜間中途覚醒、不眠、日中の眠気、睡眠習慣）あった。中学生は睡眠関連疾患のスクリーニング項目は算出できない。その他の回答については付録Bにまとめた。



注1, RLS (Restless Legs Syndrome)



注1, RLS (Restless Legs Syndrome)

メディア使用に関して

幼児は平均116.9分(最小30分-最大180分)、小学生は平均107分(最小0分-最大180分)、

中学生のメディア使用の内訳は、TV 視聴平均 150 分（最小 120 分 - 最大 180 分）、ゲーム 140 分（最小 60 分 - 最大 180 分）、メールやネット 360 分であった。これらは 22 時以前の使用状況であり、22 時以降のメディア使用はなかった。

IV, 考察

本研究では、入所中の親子を対象に基本属性を整理し、過去のトラウマエピソード、現在の生活習慣や日常生活の問題行動に関する実態を明らかにすることを目的とした。

本研究を実施して明らかになったことは、DV 被害女性に関しては、一時保護状況下の安全が守られた中で生活することで健康状態は良好であるが、精神状態は 4 割以上があまりよくないと感じているという回答結果が得られた。長期間の夫からの暴力内容は多くの人が重複したものが多く、大きな精神低負担になっている。そして、日常生活上の問題行動を実行機能から評価したところ、30 代の女性でメタ認知の問題が多いということが明らかになった。メタ認知の問題が多いということは、一度に多くの物事を処理することや、先の見通しを持つことが困難な場合が多いことが予想される。混乱した状況の中ではそのような問題が起きても不思議ではないため、より丁寧な説明や視覚的支援が有効であると考えられる。

子どもの生活習慣に関しては、幼児、小学生中学生の起床時刻や就床時刻やメディア使用時間に関しては、全国平均と大きく変わらなかった（三星ら 2012; Kuwada et al.,2018）。しかし、小中学生における睡眠の問題スクリーニング項目の得点が高く、睡眠の質は十分ではない可能性が示唆された。以上の結果から睡眠時間は長い、効率的な睡眠がとれていない可能性が示唆されるが、母親が子どもの睡眠を評価した項目では、幼児、小学生の母親 9 名中 8 名が子どもの睡眠を評価する項目において、どちらかと言えば良いと思う～非常に良いと思うという評価がなされていた。子どもは睡眠不足であったとしても眠気の訴えや居眠りが成人に比較して少ないために大人が子どもの睡眠不足を察知しにくい（鈴木,2003）ことが明らかになっている。この点は注意すべき点であり、今後より詳細な調査が必要であると考えられる。

（子どもの）日常生活上の問題行動を実行機能から評価したところ、5 歳 -7 歳の男子でメタ認知、8-10 歳でモニタに問題が多いことがわかった。メタ認知やモニタの問題では、やるべきことを最後まで終わらせることへの困難や、その物事について自分自身で振り返ることに困難が生じる可能性が考えられる。子ども自身が最後まで物事に取り組めるようやるべきことを書き出すこと、必要なことは一度に全て伝えず、少しずつ伝えていくことが有効であると考えられる。また、8-10 歳の女子で感情制御の問題が多いことがわかった。感情制御に問題が出たときにはクールダウンの時間を方法を考えることや感情調整の方法を一緒に考えていくことが必要となることが考えられる。混乱した状況では大人でも感情制御が困難になることが予想される、子どもにもわかるよう、できるような方法で物事に取り組めるような配慮が必要かもしれない。

本研究の限界点

本研究では、研究参加者の安全に配慮して職員の前で回答する形をとった。その中で今後必要な支援に関する項目を記入するには適さない環境設定であったかもしれない。また、子どもの評価に関しては、多くが親の主観的評価なので結果の解釈には留意が必要である。今年度は、母子同伴の入居者数が少なかったこと、研究参加への同意はしたが、その後質問紙回答中に過去のエピソードを想起し精神的な混乱がみられる女性や、精神的に不安定な母親が多くみられたため回答を中止した場合や、研究参加へのリクルートが困難であったためサンプル数が少なく統計的な解析ができなかった。今後は、さらに研究方法を考慮した上で詳細な検討が必要であると考えられる。

引用文献

Kuwada, A., Mohri, I., Asano, R., Matsuzawa, S., Kato-Nishimura, K., Hirata, I., ... & Ohno, Y. (2018). Japanese Sleep Questionnaire for Elementary Schoolers (JSQ-ES): validation and population-based score distribution. *Sleep medicine, 41*, 69-77.

三星喬史 . (2014). 日本の幼児および小学生の睡眠習慣と睡眠に影響を及ぼす要因・日本の幼児の睡眠習慣と睡眠に影響を及ぼす要因について・日本版小学生睡眠質問票の開発 .

内閣府男女共同参画局統計資料「配偶者からの暴力に関するデータ」. 2018.

http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/data/pdf/dv_data.pdf (令和2年2月25日アクセス).

Roth, R. M., & Gioia, G. A. (2005). Behavior rating inventory of executive function--adult version. Lutz, FL: Psychological Assessment Resources.

付録 A

自由回答：現在の支援に満足しているところがあれば自由にお書きください。

- 一番初めに電話したときにじっくり話を聞いてくれたこと、一緒に考えましょうと言ってきて実際一緒に考えてくれたこと、一時的ではなくずっとその時々アドバイスをくれた。絶対に私を否定しなかった。シェルターでも親身になってくれているのがよく分かった。
- 職員皆様良くして下さい、子どもに優しくして下さいとても感謝しています。衣類や日用品ももらえてとても助かりました。夫からの DV があり、実家にも居場所がないと感じてつらいと思っていたのでこういった支援センターがあって本当によかったと思いました。
- 私も子どもたちもゆったり過ごさせてもらい、ありがたく思います。
- 毎食のご飯がとてもおいしかった。
- 職員さんには息子ともども大変よくして頂いています。すべてにおいて感謝しかないです。
- 安全が守られている。規則正しい生活が送れる。
- 優しく丁寧な職員の方々のおかげで気持ちをリセットできた。手続きもスムーズに進めて頂き、ありがとうございました。たっぷり睡眠をとり豪華な食事を頂き、元気になりました。
- 規則正しい生活ができる。
- 毎食おいしいごはんを出していただいているところ、カウンセリング、相談等、いつも声をかけて下さり気持ちが楽になった。
- 私や子供が主人の暴力によって受けた心の傷を理解しようとして下さって、話もしっかり受け止めて聞いて下さり、これからの支援の在り方を支えて頂いていることに満足だけでなく、感謝しています。自分の壊れてしまった心を保護・支援して頂きながらゆっくりと回復させる方向に導くようにして頂いてありがたく思っています。自分ひとりじゃなく、いろいろな方に支援されて相談できることが今までできなかったことができて本当に良かったです。
- 寄り添って話を聞いてもらえる。生活に不自由がないように物などを貸してもらえる。あたたかい食事を提供してもらえる。
- 相談の時間には子どもも保育士さんをお願いすることができ、良かったと思いました。疑問に思ったことや不安なことはすぐに返答してもらえて安心しました。

自由回答：もっとこういう支援があればいいなと感じることがあれば自由にお書きください。

- なかなか難しいとは思いますがDVについての知識が広まるといい。特に市役所の職員などの手続きに必要なところの
- インターネットができれば個人でも情報を集めたりできるので使用できる環境があればうれしい。
- 今後の段取り的なことがもう少し具体的にでも教えて頂けたらありがたいと思います。ただ待っているだけではつらい時もあります。
- 新しい生活を始めるにあたっての情報収集（子どもを育てやすい地域など）

付録B 中学生の子どもの睡眠スクリーニング項目及びライフスタイル項目に関する回答

入眠にかかる時間	人数	%
10分以内	1	33.3
30分以内	1	33.3
1時間以上	1	33.3
合計	3	100.0

寝返りなど睡眠中動きが多い	人数	%
まったく当てはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまらない	1	33.3
あてはまる	1	33.3
合計	3	100.0

大きないびきをかく	人数	%
あてはまらない	2	66.7
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

口を開けて眠る	人数	%
あてはまらない	2	66.7
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

朝起きたときの機嫌が悪い	人数	%
まったく当てはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

昼間居眠り	人数	%
まったく当てはまらない	1	33.3
あてはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

日中イライラしていることが多い	人数	%
あてはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

昼間集中力がないことが多い	人数	%
まったく当てはまらない	1	33.3
あてはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまらない	1	33.3
合計	3	100.0

友達やきょうだいへの暴力暴言が多い	人数	%
まったく当てはまらない	2	66.7
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

子どもの睡眠は良いと思うか	人数	%
どちらかといえば良くない	1	33.3
どちらかといえば良い	1	33.3
良いと思う	1	33.3
合計	3	100.0

自分の睡眠は良いと思うか	人数	%
まったく良く思わない	1	33.3
そう思わない	1	33.3
どちらかといえば良い	1	33.3
合計	3	100.0

毎日朝食をとる	人数	%
あてはまる	2	66.7
非常に当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

夜間外出	人数	%
まったく当てはまらない	2	66.7
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

夜9時以降に外出する	人数	%
まったく当てはまらない	2	66.7
非常に当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

布団の中でネットやゲームをする	人数	%
まったく当てはまらない	2	66.7
非常に当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

朝なかなか布団から出られない	人数	%
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
あてはまる	1	33.3
非常に当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

寝坊して学校に遅刻	人数	%
どちらかといえば当てはまる	3	100.0

夜になると不安になる	人数	%
あてはまらない	2	66.7
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

学校で居眠りの指摘	人数	%
まったく当てはまらない	2	66.7
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

いつも疲れている	人数	%
まったく当てはまらない	1	33.3
あてはまらない	1	33.3
あてはまる	1	33.3
合計	3	100.0

就床起床がばらばら	人数	%
どちらかといえば当てはまらない	1	33.3
あてはまる	1	33.3
非常に当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0

昼夜逆転している	人数	%
あてはまらない	1	33.3
あてはまる	1	33.3
無回答	1	33.3
合計	3	100.0

昼間、立ちくらみや気分が悪い	人数	%
あてはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまらない	1	33.3
どちらかといえば当てはまる	1	33.3
合計	3	100.0